

VOPバイブルスクール

# 基礎講座

死

BIBLE CORRESPONDENCE SCHOOL

12

- 第 1 課 宗教とは
- 第 2 課 聖書
- 第 3 課 聖書の神
- 第 4 課 人間とは
- 第 5 課 救い主イエス・キリスト
- 第 6 課 救いとは
- 第 7 課 信仰
- 第 8 課 祈り
- 第 9 課 苦しみの意味
- 第 10 課 十戒
- 第 11 課 安息日
- 第 12 課 死
- 第 13 課 世界の終末とキリストの再臨
- 第 14 課 教会
- 第 15 課 セブンスデー・アドベンチスト教会

今回学びます

# BIBLE CORRESPONDENCE SCHOOL

## 死

生命を延ばすことが医者の新らしい仕事である」と言ったのは、一三世紀の哲学者フランシス・ベーコンでした。彼は医者者の責務を「健康の保持、疾病の治癒、生命の延長」であるとして、「特に、生命の延長は新しい責務であり、最も崇高な仕事である」と述べました。彼の予言通り、延命は現代医学の最高の使命となり、その結果、人間の寿命は著しく延びました。

しかし、ゴムひもをながくながくと引つ張っていても、いつかはぷつんと切れてしまうように、いくら医学が発達しても、いつかは命の終わる時が来るのです。「すべての人に死は必ず臨む」。これは厳然たる事実です。その意味で医学は常に

敗北の連続なのです。哲学者ハイドガーは、人間を「ザイン・ツーム・トーデ（死に至る存在）」であると定義しました。

聖書は、人間の命について「あなたがたには自分の命がどうなるか、明日のことは分からないのです。あなたがたは、わずかの間現れて、やがて消えて行く霧にすぎません」（ヤコブの手紙四章一四節）と述べています。

死は恐ろしい現実です。それは、今ここに存在している自分自身が消滅してしまうからです。宗教学者岸本英夫氏は、『死を見つめる心』の中で、彼自身ががんの宣告を受けた時の心境を、次のように書いています。

「私は、この二週間の間に、

今さらながら、人間の生命への執着の強さを知った。ひとたび、生命が直接の危険にさらされると、人間の心が、どれほど、たぎり立ち、たけり狂うものであるか。そして、いかに、人間の全身が、手足の細胞の末にいたるまで、必死で、それに抵抗するものであるか。私は、身をもつて、それを感じた。一日の生活をややく終えて、夜が来ると、身も心もヘトヘトに疲れ切っていた。ベッドに横たわると、もう、手も足も動かすことができないほどであった。それは、はなはだしい精力の消耗であった。ただ、ささているものは、頭だけであった」。

パスカルは「人間はみな死を

宣告されているという意味では、本質的には死刑囚と変わらぬ」と述べ、「人間は幸福になるために、死について考えないことにした」(『パンセ』)と言っています。日常の忙しさにまぎれてあたかも永遠に生き続けるかのように、死を全く忘れて生きることが決して賢明な生き方ではありません。いつか人間は不意に死の前に立たされる時が来るのです。いにしえの歌人は「ついに行く道とは聞きしかど、きのうきょうとは思わざりしを」と歌いました。死というのが不意に襲ってくるのです。

がん終末期患者を扱う現代ホスピス医療においては、いかに最後まで生きる希望を支えてい

けるかが大きな課題になっていきます。がんと分かった日から、平穩無事だった人生がいきなりがんと闘いに巻き込まれてしまします。がんと告知されたときのショックについて、乳がん患者の会「あけぼの会」の創設者ワット隆子さんはこう書いています。

「陽が照っている大通りを鼻歌うたいながら大またで闊歩していたら、突如、マンホールの穴に落ちこちた。一瞬、自分の身に何が起きたのか分からない。暫くたってあたりを見渡すと、暗い深い穴の中に自分はいる。助けてー、と叫んでみても外まで声が届かない。先刻までの人生とは完全に遮断されてしまった。悲しい、さみしい、悔しい、

孤独、不安、恐怖、絶望」(『がんからの出発』)。

不治の病と闘いながら、多くの者は、孤独の内に絶望と虚無感に襲われてしまいます。がん患者の「遠のきの現象」と言われるものがあります。みなが遠く感じられ、孤独を感じるのです。死んでいくのは他ならぬ自分であり、死は自分一人で迎えるものであることを、この時ほど思い知らされることはありません。がんを知ったご婦人はこう書いています。

「がんになった人の話は聞いていましたけれども、よりにもよってこの自分になるとは！ 全てのものが急に自分から遠のいてしまいました。夫も子供も、

世の中も、全て幕を隔てた向この世界のことのようになり、自分は幕のこちらで、たった一人、間もなく死んでこの世から去っていく、という現実と向い合っているのです」(神谷美恵子著「生きがいについて」)。

死という厳粛な事実を前にしていったい誰がそれに耐えられるのでしょうか。そのような時にあってもなお、生きることの意味を見いだすことができるのは、いったい何によるのでしょうか。

「明日ありと思ふ心のあだ桜、夜半に嵐の吹かぬものは」という歌があります。人生にはいつ何が起るか分からないということを教えてくれる歌です。

キリストは、ある日突然死に直面することになった「愚かな金持ち」の物語をされました。

「ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、こう自分に言ってやるのだ。』

「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。『しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いつたいだれのものになるのか』と言われた。自分のために富を積んでも、神

の前に豊かにならない者はこの  
とおりだ」(ルカによる福音書二二章一  
六―二二節)。

これは成功した金持ちの物語  
です。私たちは、この金持ちの  
したことをどう思うでしょうか。  
彼は経済的に成功した実業家で  
した。勤勉きえんに働いた結果、豊か  
な収獲を得ることができました。  
そして彼は、いろいろと思慮深  
く将来の計画を立てたのです。  
彼は立派な生活設計を立てま  
した。

しかし、神は、この金持ちに  
対して「愚かな者よ」と言われ  
たのです。彼は、どの点で愚か  
な者だったのでしょうか。それ  
は、死というものを彼の人生設  
計の中に入れていなかったこと

です。彼は自分の人生を本当の  
意味で理解していませんでした。

人生というものは、彼が計画し  
たようにいつまでも続くもので  
はなかったのです。「今日が最  
後である」という日が来ること  
を忘れていました。もちろん知  
らなかつた訳ではなかつたので  
すが、それを自分の実際の人生  
設計に入れていなかったのです。  
そして準備のないまま、自分の  
人生の厳きびしい現実に直面しなけ

なぜ死があるのででしょうか。

聖書は、「罪の支払う報酬は死  
である」と述べて、死を「罪の  
結果」と教えています。人間が  
神に反逆した結果、死がもたら

ればならないことになったの  
です。

キリストは「自分のために富  
を積んでも、神の前に豊かにな  
らない者はこのとおりだ」と言  
われました。「神に対して豊か  
になる」とはどういうことでは  
ょうか。死を超えた生き方をす  
るためには、人生の基盤きばんとして  
神を考慮に入れた人生設計をす  
る必要があるということです。

されたのです。

創世記は、「主なる神は、土  
(アダマ)の塵ちりで人(アダム)を  
形づくり、その鼻に命の息を吹  
き入れられた。人はこうして生

## 罪の結果としての死

「さる者となつた」(創世記二章七節)と述べています。人は神から命を与えられました。

神は人類を創造されたとき、アダムとエバに選択の自由を与えられました。彼らが死ぬべき存在になるかは、神に従うか否かの選択にかかっていました。神は、エデンの園に「善悪を知る木」を置かれて、こう言われました。

「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。主なる神は人に命じて言われた。『園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう』」(創世記二章一五〜一七節)。

ある日、蛇(サタン)が女のところにやってきて、誘惑に陥れます。

「主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。『園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。』」

女は蛇に答えた。『わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。』

蛇は女に言った。『決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知れるものとなることを神はご存じ

なのだ。』

女を見ると、その木はいかにもおおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた」(創世記三章一〜六節)。

サタンは、女ばかりか男をも誘惑に陥れてしまいました。サタン(蛇)はエデンの園においてエバを誘惑して罪に陥れたとき、「あなたは死ぬことはないでしょう」と偽りました。霊魂は死ぬことはないという「霊魂不滅」の思想は、サタンによるいつわりの一つでした。

神はアダムに「塵にすぎないお前は塵に返る」(創世記三章一九節)と言われました。このとき

からアダムは死ぬ者となり、それは全人類に及びました。

「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです」(ローマの信徒への手紙第五章二節)。

「一人の罪によって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになるのです。

そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされ

て命を得ることになったのです。一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。

律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでありました。しかし、罪が増したところ

## 「靈魂不滅説」の誤り

歴史的事実として、キリスト教界においては、一種の靈魂不滅が信じられてきています。靈魂不滅説においては、人間の靈魂は、死んだ後、直ちに天国(あるいは地獄)に行くと考えられます。肉体が死んだ後も靈魂は生き続けていくというのです。

この思想は、ギリシャ思想の

には、恵みはなおいっそう満ちあふれました。こうして、罪が死によって支配していたように、恵みも義によって支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストを通して永遠の命に導くのです」(ローマの信徒への手紙第五章一七―二一節)。

影響を受けたものでした。もともとヘレニズム(ギリシャ思想)は、靈魂不滅の思想でした。靈魂不滅の思想においては、物質(肉体)は悪であり、肉体は外側の衣服に過ぎません。生きていくかぎり、肉体は靈魂が自由になるのを妨げていると考えられます。死は、靈魂を肉体から解放し、



靈魂は永遠に生き続けるというのです。

しかしこのような考え方は、聖書本来の思想ではありません。聖書は、身体や靈魂からなる人間を、あくまでも分離できない統一した存在として主張しています。人類創造のとき、「主なる神は、土(アダマ)の塵で人命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」(創世記一章七節)と聖書は主張しています。

聖書では、人間の命は、あくまでも神から与えられた賜物として理解されています。不死というものは、人間に最初から無条件に与えられたものではありませんでした。

人間の肉と霊は分離できない統一体です。肉体を離れて霊は存在しませんし、霊と肉は相対立するものではありません。そして、人間の死は、統一体としての死、すなわち全体的死なのです。決して肉体だけの部分死ではありません。聖書の言う「罪の支払う報酬は死である」という理解は、靈魂も含めた人間の全体的死であり、肉体だけの死ではありません。罪により贖あがな

## 死は眠り

聖書は死者を「眠りについた人」(テサロニケの信徒への手紙一・四章二三節)と表現しています。眠りであるということは、目が覚める時があるということで、聖書

われなければならぬのは、靈魂と身体とを含めた人間全体なのです。

また靈魂不滅の思想は、「靈魂の無罪性」を前提にしなければ成り立ちません。これは聖書の思想と矛盾する考え方です。聖書は、罪の影響は人間の身体だけではなく靈魂をも含めた人間の全存在に及んでいることを教えているのです。

は復活を前提としています。

靈魂不滅の思想は、聖書にはありません。死者は何も知らないう状態なのです。「生きているものは、少なくとも知っている

自分はやがて死ぬ、ということ。しかし、死者はもう何ひとつ知らない。彼らはもう報いを受けることもなく、彼らの名は忘れられる。その愛も憎しみも、情熱も、既に消えうせ、太陽の下に起こることのどれひとつにも、もう何のかかわりもない」

(コヘレトの言葉九章五、六節)。

現代の代表的神学者の一人オスカー・クルマンは『現代の復活』という書物の中で「靈魂の不滅か、死者の復活か」との問いを發してこう述べています。

「今日、博學なプロテスタント、カトリックであれ、あるいはそうでない者であれ、普通一般のキリスト者に、死後の人間の運命に対する新約聖書の教え

はどんなものと考えているのかをたずねるとするならば、ほとんど例外なく『靈魂の不滅』という答えを得るであらう。しかしこの広く受け入れられている考えは、キリスト教についての最大の誤った理解の一つである」。彼は、死についての聖書の教えを探求しながら「死者の復活の概念は、キリストの出来事につながっており、それゆえに、ギリシヤ的な不滅を信じる信仰と相容れないのである」と主張しています。

パウロは、死者の状態と、復活の出来事について、こう述べています。

「兄弟たち、既に眠りについた人たちについては、希望を持

たないほかの人々のように嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいてほしい。イエスが死んで復活されたと、わたしたちは信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してくださいませ。

主の言葉に基づいて次のことを伝えます。主が来られる日まで生き残るわたしたちが、眠りについた人たちより先になることは、決してありません。すなわち、合図の号令がかかり、大天使の聲が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている

る者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることとなります。ですから、今述べた言葉によって励まし合いなさい」（テサロニケの信徒への手紙一・四章二三〜一八節）。

聖書は、キリストが再びおいでになる時（再臨の時）、死者は復活すると述べています。死者は、死んですぐに天国に行くのではありません。死とは、神によって創造された生命全体の消滅を意味します。すなわち、靈魂は決して不滅ではなく、死とは靈魂と身体を含めた人間存在の死なのです。

聖書においては、死と永遠の

生命とは、常にキリストの救いの出来事と結びつけられています。統一体としての人間は、死後、再びキリストを信じる信仰により新たな命に復活させられます。復活とは、まさに死んだ人全体が神による創造という行

## 死を超えて生きる

『甦った人』は、死刑囚・久田徳造だくとくぞうさんとあるご婦人との間の書簡集です。この本には、久田徳造さんが、絶望のどん底においてキリストと出会い、その後いかにキリストによって変えられていったかが記されています。

久田さんは、ごく幼い時にお母さんに捨てられ、天涯孤てんがいきこ独と

為によって新しい命よみがえに甦らせられるということです。この復活の希望があるからこそ、クリスチャンは死に臨んでもなお、希望を持ち続けることができるのです。

なり、養護施設ようごに引き取られ、そこで育ちました。

学校は、小学校二年までしか行くことができませんでした。やがて悪の道に走り、少年院を出たり入ったりしているうちに、恐ろしい罪を犯してしまい、ついに二九歳で死刑が確定しました。

死刑囚として、刑務所につな

がれるようになったとき、彼は、おびえ、おののき、わめき、狂ったようになりました。死刑執行はいつのことか分かりませんが、確実なことになってしまいました。それを思うと、恐ろしくて気も狂わんばかりの毎日になってしまったのです。そういう中で、彼はクリスチャンの婦人と出会い、キリストを知るようになりました。その時の心境を、彼は歌に託して、「極刑に 苦しみがきつ 幾年か来て わが休息の場よ 十字架のもと」と表現しました。ある日の手紙に、彼はこう書いています。

「救われようもなかった僕のような者にとつては、主のお約束の全く変わることはない、こ

の大きな憐れみは、そして喜びは、言葉に言い尽くせません。

死刑囚の僕に、人には想像もつかない大きな希望が与えられました。この僕に与えられた大きな神のお恵みを、もし他の人々にそのまま伝えることが出来たならば……。

死刑囚とされて初めて、人間としてこの世にあることを喜び感謝し、生かされることに望みが与えられました」。

やがて、ついに死刑執行の日がやってきました。前日に死刑執行を知らされ、お別れの集いが刑務所の中でもたれました。

その夜、彼は床に就かず、多くの人に感謝告別の言葉を書き続けました。そして最後の手紙と

して、このご婦人にこう書き残しました。

「先生、おはようございます。お元気でいらつしやいますか。いつもお祈り下さいまして有難うございます。

いよいよ今日、あと数時間で主のみもとに行かせていただくことになりました。今、僕はこの恵みのひと時を心から味わっています。あの恐ろしくて仕方なかった死刑が、魂の底から恵みに変えられています。主を全く信じ、その確信を心から持つことが出来ました。執行を目前にした僕は、魂の底から安らかに住まわせていただいております。何の不安も恐れもなく、ただ主を信頼し、そのお約束にすべてをお任せすることが出来

ています。

先生、短い間ではございましたが、いろいろご指導くださいまして本当にありがとうございます。どんなにか僕は励ましました。どんなにか僕は励まされたことを頂戴(いた)しよう。

昨日から手紙の書きっぱなしで、一睡もしておりません。もう二、三通書きまして入浴に行かせていただき、主の御許にまいります。まだまだ書きたいことは沢山ございますが、この辺で失礼させていただきます。

お体、あまり良くございません。ん様子、くれぐれもご自愛ください。さいますようにお祈りします。さようなら」

翌朝、彼は、係官たちに感謝の言葉を述べて、確かな足取り

で絞首台(こうしゅだい)への階段を上っていきました。その時、死刑に立ち会った人の証言が載せられています。

「処刑の日、その時も何の乱れもありませんでした。その最後のお別れの時も、『自分は少しも変わらぬ態度で、喜んで召されたと、ご一家にお伝えください』と繰り返し頼まれました。最後にタバコを勧められて『初めて神様にお会いするのに頭がぼんやりしてはいけません』とお断りしてから、所長様から最後の水を頂いて、静かに死につかれました。何人かの職員の方からは『立派(かたな)でした』と感嘆(かたん)の声を聞きました。『彼をあそこまでにした宗教の偉大さを思う』とは、ある幹部の方のお言

日常の忙しさにまぎれて  
あたかも永遠に生き続けるかのように、  
死を全く忘れて生きることは  
決して賢明な生き方ではありません。

葉でした」。

死刑を前にしてこのように振るまい、かつ生きることができたこと、これこそがまさに奇跡ということができるとしよう。

死を前にして、彼のイエス・キリストに対する信仰と、その信仰がもたらす平安が、それを可能ならしめたのです。彼の最後の手紙に引用されていた聖句は、箴言一章三三節でした。

「わたしに聞き従う者は安らかに住まい、災に会う恐れもなく、安全である」(口語訳聖書)。

イザヤはこう書いています。

「草は枯れ、花はしほむ。しかし、われわれの神の言葉はとこしえに変わることはない」(イザ

ヤ書四〇章八節／口語訳聖書)。

私たちも、時代を超えた永遠につながる生き方をしようとするなら、神への信仰に基づいた生き方が必要になってきます。四肢麻痺ししまひという障害を背負いながら、その苦しみの中でキリストに出会った星野富弘さんは、次のような詩を書いています。

いのちが

一番大切だと

思っていたころ

生きるのが苦しかった

いのちより大切なものが

あると知った日

生きているのが

嬉しかった

(星野富弘『鈴の鳴る道』より)

神学者ボンヘッファーは『現代キリスト教倫理』りんりの中で、現

代の「死の偶像化」、すなわち「死が全ての終わり」であると考ええることに対して警告けいこくを發しています。彼は「死が最後のもの、すなわち偶像化されるとき、地上の全てのものが全てであるか、あるいは無とされてしまうのである」と言っています。死が絶対的なものとして偶像化されるとき、それは、一方では「この世の至上主義」しじょうになり、他方では「虚無主義」おちいに陥ってしまいます。死を超えて、この世のいのちより大切なものがあふることを見いだすとき、私たちの人生は豊かな実りあるものとされるのです。

## 神のご計画のうちに生きる

『わが涙よわが歌となれ』は、原崎百子ももこさんの病床日記です。

牧師である夫の原崎清氏から肺がんであることを知らされてから、亡くなるまでの四四日間の記録です。治癒不能の肺がんであることを知った原崎氏は、妻に本当のことを知らせるべきかどうか約三か月間悩み続け、ついに真実を告げました。

病床日記はその日から始まっています。百子さんはその夜、次のように書いています。

「今日は私の長くはない生涯にとって画期的かくきな日となった。私の生涯は今日から始まるのだし、これからが本番なのだ。

私は今本当に正直にそう思っている。今日をそのような日にしてくれた清に、その勇氣と決断と愛とに、どんなに感謝していることか！ ……ありがとう、ありがとう、よく話して下さったわね。可哀かわいそうに！ さぞ辛つらかったでしょう、辛かったでしょう」。

同じ夜、彼女は「愛する子供たちへ」と題して次のように記しています。

「お母さんのこの病気がすでに手遅れになっていくことに就いては、それは一方で人間的失敗の積み重ねにちがいないのだが、その意味でお母さんはあ

なたがたに申しわけないだけでなく神さまに対して本当たいまんに怠慢たいまんであったとお詫わびするほかないのだけれど、しかしそのことをも、もっと大きく大きく包みこんでいる神さまのみ手の中でこのことが起こっていることを思うと、お母さんは赦ゆるしを乞こいつつ、しかしただの後悔ごかいといったものでなく、み旨むねをかしこみ畏おそれて、それに黙もくって従したがうことしか出来ません。それだけが今お母さんのなすべき真に積極的な行為ゐでしよう。そして、信まことじ従したがう中で、お母さんは子供たちに、長生きするよりもっといい、もっと別のものを与え得ると今確信まことしています。

それにしてもごめんね、君たち。四人の子供たちよ。今お母

さんは、(日記の)表紙のすぐうしろのところに、こう書きました。『お母さんを、お母さん自身を、あなたがたにあげます』。こんなにしかりいようのないお母さんの気持ちを、あなたがたもいつかわかってくれるでしょう。自分たちが母となり父となった日、また母として父として子を残して逝く日に……。

……

神さまが、いつまでもいつまでも、あなたたちのそばに居ることを、私からおとりあげになる。やはり涙のあふれるつらいことです。お母さんは今書きながら泣いているわ。でも神さまを恨む気持ちは一つもないの。お母さんは泣いているけど、不平ではないの。あなたたちが可

哀そうだけど、自分自身を可哀そうがってはいないの。

だから、お願いよ、神さまを恨まないで。少しは恨んだとしても少しだけにするのよ。そして、詩篇にもくり返し言われているように、神さまのなさるところすべては、その時わからなくとも、愛から出ていることに信頼してね。……

お母さんは自分の病気を知っている。やがてもっともつと肉体の苦しみがおそいかかってくることも覚悟しています。そしていつかこの肉体が死ぬことも。それもずっと先のこと、というわけにはいかないでしょう。だけれど、もつとよくお母さんにわかつていることは、そのこと全体を通して、いえお母さんの生

涯全体を通して、神さまは真実でいらっしやる、神さまの愛はますます大きく深くお母さんを包んでいて下さる、そして何よりもキリストがお母さんと共にいて神の国へと伴って下さるということ。……

どうか、キリストの道を歩み、右へも左へもそれないで下さい。そのことのために、この母の苦しみを、涙を、叫びを、祈りを、信頼を、感謝を、踏み越えて進んでいって下さい」。

その翌日の日記に、彼女はやっておきたいこと、やりたいこととして、教会学校のこと、礼拝、聖書研究・祈禱会への出席のことなど具体的に列挙して、最後に「いつも通りの『お母さ



ん」でいよう」と記しています。彼女は自分の決意通り、一日一日を牧師の妻として、教会員として、そして母として精一杯生きていくのです。

しかし、がんの進行と共に呼吸困難があらわれ、体力も衰弱してくるのです。死の四日前の日記にはこう記されています。

「神さま、出来ないことがほとんどんふえています。トイレまでも人の手をかりることになりました。息も自分の力だけでは出来ません。四六時中、酸素ボンベにビニールの管でつながれています。神さま、まるで仔犬のようにございます。時々キャンキャンふうふう言うのまでも神さま、目が見えます。耳

もきこえます。字もかけます。口で歌えなくても頭と心とでさんびかが歌えます。風を心地よいと感じられます。人のやさしさをうれしいと思えます。冷たい麦茶もとても美味しくうございます。考えられます。感謝できます。祈れます。『あ、り、が、と、う、ご、ざ、い、ま、す』と、区切りながら言うことが出来ます。時がわかり、日がわかります。……

神さま、私は生きております。こんなにも充実して。神さま、何よりうれしいのは、神さまを信じ仰ぐことが出来ることです。イエス・キリストの道を、私も生命をかけて進みゆくことが出来ることです。そして……やがてキリストに伴われてみ前にで

ることを許して下さいませ」。

この四日後、容態が急変する中、声にならない声で、賛美歌「神はわがやぐら」を歌い、「キリスト！」と叫んで、あとは指で「ニオルカイホウ（解放）」と書き残し臨終を迎えたのでした。

死を前にしても、神を信じ感謝しつつ、このような充実した生を生き抜くことができたということは実に奇跡としか言いようがありません。良く知られている聖書の言葉、詩編二三編の「死の陰の谷を行くときもわたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる」とのみ言葉の真実性を証しするものでした。

私たちがたとえ「死の陰の

「谷」を行くことがあっても、聖書は「神が共におられること」を約束しているのです。たとえ死に至ることがあっても、死を越えて希望を見いだすことができるのです。

聖書は、人間の生命は神様からの恩恵<sup>おんけい</sup>として与えられたものと教えています。人が生きていくということは、神様から命を与えられてはじめて生きていくということなのです。ゆえに、人が「生きる」ということは、実は「生かされている」ことなのです。したがって、人が生かされて生きていくということは、私たちはみな神のご計画の中に生きていくことなのです。それは、たとえどんなに苦し

い人生であっても、私たちが生きていく限り、神様から私たちが一人ひとりに独自で固有の生きる意味と使命が与えられている、ということなのです。

聖書は、「死」は、この世に属するものであり、永遠には続かないことを教えています。キリストの再臨のとき、この死に對する最終的勝利が約束されているのです。

「この朽<sup>く</sup>ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。

『死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか』(コリントの信徒への手紙一・一五章五三〜五五節)。



## 問題

答案用紙に解答をご記入の上、郵便かFAXにてお送りください。  
郵便の場合は切手を貼ってご投函ください。

- 問題1 がん患者の感じる「遠のきの現象」とは何ですか？
1. 病気が重いので、普通の生活ができないと感ずること
  2. 人生設計が崩れ、夢が叶わないと感ずること
  3. みなぎ遠く感ずられ、孤独を感ずること
- 問題2 聖書は死について何と教えていますか？
1. 人間が神に反逆した罪の結果である
  2. 神の天地創造の欠陥による結果である
  3. 考えずに全く忘れて生きるべきである
- 問題3 創世記に示されているサタンによる偽りの思想は次のどれですか？
1. 「幽体離脱」
  2. 「靈魂不滅」
  3. 「輪廻転生」
- 問題4 聖書は死者を何と表現していますか？
1. 「永遠の生命を持った肉体」
  2. 「肉体から解放された靈魂」
  3. 「眠りについたら」
- 問題5 あなたはいつか必ずおとずれる自分の死についてどのように思っていますか？

### VOPバイブルスクール 基礎講座 第12課 死

2003年11月1日 初版第1刷発行  
2008年6月1日 初版第3刷発行  
2013年3月1日 新装版第1刷発行  
2022年3月15日 新装版第4刷発行

〒241-8501 横浜市旭区上川井町846 045-921-1416(電話) 045-921-2319(Fax)

